



# 学校だより

10月号

令和5年9月25日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



## 「<sup>はく</sup>拍<sup>どう</sup>動」

学校長 後藤 直樹

本校の玄関には、そこを通る子どもたちの多くをホッと笑顔にしてくれる仕掛けがあります。それは一匹のウサギです。毎日、休み時間になると、委員会の児童が手際よく掃除や餌やりをしていますがその間、ウサギは特に逃げ出すこともなく、周辺を歩き回っています。ですからこのチャンスに抱いたり、柔らかな毛並みを撫でたりするのを楽しみに、毎日やってきている子どももいます。二歳半になるこのウサギは子どもたちに「モア」と名付けられ、飼育小屋で暮らす「マカロン」と共に皆に可愛がられています。

そもそも小学校で小動物を飼育する教育的な目的は、生命の尊重や飼育活動に伴う責任感の醸成などが挙げられます。また、生活科や理科では体のつくりや動物の誕生を学ぶ教材としても扱われています。鳥インフルエンザの流行以来、ニワトリを飼育している学校はほとんど無くなりましたが、ウサギは今も多く的小学校で飼育されています。現代の子どもたちは、たとえ死んでも、リセットボタンで簡単に再生することができるバーチャルの世界に接する時間が多くなっています。ですから本物の生き物に直接触れ、その体温や息遣い、そして心臓の鼓動を感じ、時にはその生と死にも向き合う場面も、豊かな心を育むための大切な経験ではないかと考えています。また、港南区には全小学校 21 校に獣医師が訪問指導してくれるという独自の制度があり、もう一人の校医さんともなっています。

さて、及ばずながら私も毎年6年生の理科「体のつくりとはたらき」の特別授業として、生きたヘラブナの解剖を経験させていますが、その授業で気付いたことがあります。とくに指示をしていませんが、解剖が終わるとほとんどのグループの子どもたちが、取り出した腸や浮き袋をもとの場所に戻そうとするのです。同じ学習を魚屋で購入したイワシを使ったこともあります。そうした行動は見られませんでした。そして、この学習の中で子どもたちに是非見せておきたいものがあります。それは、授業が終わっても尚、拍動を続けている心臓の姿です。子どもたちが「命」そのものを見つめ、そこから何かを感じ取ってくれればと考えています。

